

マルタ島とバイロンの地中海

— 『チャイルド・ハロルドの巡礼』 第1巻, 第2巻における ヨーロッパの過去と現在

Malta and Byron's Mediterranean World:
The Past and Present of Europe in *Childe Harold's Pilgrimage* I and II *

後 藤 美 映

Mie GOTOH

英語教育研究ユニット

(令和4年9月29日受付, 令和4年12月20日受理)

1. はじめに

1809年7月2日にジョージ・ゴードン・バイロン (George Gordon Byron) は、イギリスのファルマス (Falmouth) の港を出航し、ポルトガル、スペイン、ジブラルタル (Gibraltar)、サルディニア島 (Sardinia) を経て同年の8月31日にマルタ島 (Malta) のヴァレットタ (Valletta) に到着する (*BLJ* 1: 223)。その航路を概略すれば、まず、ファルマスから南下し、イベリア半島の西、ポルトガルの首都リスボン (Lisbon) を経て、東へ進み、国境を越えて陸路でスペインに入国し、セヴィーリャ (Seville) に到着、その後、カデイス (Cádiz) から、トラファルガー岬 (Cape Trafalgar) 沖を航行してジブラルタルから、サルディニア島、シチリア島 (Sicily) を経てマルタ島に着くというものであった。バイロンはその後、マルタ島からギリシア、トルコへ向けての旅に出ており、バイロンの手紙においてもたびたび言及されているように、この旅はマルタ島を中継地として地中海を東進するものであった (*BLJ* 1: 214, 1: 226-31)。しかし、当時マルタ島は、地中海の旅における中継地として存在するのみならず、イギリスが地中海での覇権を握るための要衝として存在しており、バイロンの旅においても重要な意義を担うことになる。

マルタ島を有するマルタ共和国 (Republic of Malta, 以下マルタ) は、ゴゾ島 (Gozo)、カミノ島 (Comino) と、二つの無人島からなり、北にシチリア、南にチュニジアが控えた、地中海の中央に位置する国である。さらにマルタは、ジブラルタルからイタリア、トルコ、パレスチナ、エジプト、リビアといった地中海沿いの東西の国々や都市に囲まれることによって、西洋と東洋とを取り結ぶ地政学的な要衝ともなる。特に貿易の面では、アフリカや中東の国々だけでなく、中国、インドといった極東の国々からも貿易品が運ばれてくる地中海において、マルタを制する国が、海路と貿易の鍵を握ることになるという歴史が展開されてきた (Hill)。1809年から始まる旅について認められたバイロンの手紙においても、マルタ島が西洋と東洋とを結ぶ交通や通信網の中継地であったことを読み取ることができる。バイロンは、リスボンやジブラルタルに滞在中においても、さらにマルタ島を発ち、スミルナ (Smyrna) やコンスタンチノープル (Constantinople) に滞在中も、友だちや母親に向けての手紙の中で、マルタ島宛てに手紙を書いてくれればそこから自分に転送されることに触れており、マルタ島を手紙が寄せられる「待ち合わせ場所」 ("the rendezvous") や「私の郵便局」 ("my post-office") と語っている (*BLJ* 1: 235, 1: 247)。

また、マルタ島がいかに地中海航路の要衝を担っていたかは、1809年から始まるバイロンの第一回目のグランド・ツアー (Grand Tour) の旅の計画からも窺える。ケンブリッジ大学の同窓生ジョン・キャム・ホブハウス (John Cam Hobhouse) を旅の連れとしたバイロンのこの旅の計画は、当初、マルタ島経由で

コンスタンチノーブルへと直接向かう航路が予定されていたが、ファルマスからマルタ島行きの船を逃し、別ルートとしてリスボンを経由するという旅がなされることになったのである (Martin 81)。しかし、別ルートとして計画された、ポルトガル、スペインからジブラルタル、そしてマルタ島を経由してアルバニア、ギリシア、トルコへと向かう航路においても、マルタ島を必ず経由したことから、いかにマルタ島が地中海航路の要であったかを窺い知ることができるといえるのである。

さらに、マルタ島を経由するバイロンのグランド・ツアーは、当時のヨーロッパの政治状況を色濃く映し出す旅であり、ヨーロッパの政治の舞台においてもマルタ島はその主要な役割を果たすことになる。まず、1809年から始まるバイロンの第一回目のグランド・ツアーは、当時のヨーロッパの政治状況を背景に、貴族の子弟による伝統的なグランド・ツアーとは大きく異なることになる。1806年にフランスでナポレオンによるベルリン勅令がスペイン、オランダ、ナポリの国王やフランスの同盟諸国の君主に宛てて出され、イギリスとの通商、および通信は禁止され、イギリス製品やイギリス植民地産商品の交易も禁止された。さらに1807年のミラノ勅令によって、イギリスはヨーロッパ大陸に対して、陸上同様、海上においても封鎖状態となる (小宮 182)。したがって、バイロンのグランド・ツアーは、伝統的なグランド・ツアーの旅程として組まれるはずのフランス、スイス、イタリアといった国々を目指すルートを取らず (Coole 150)、マルタ島を中継地として、ポルトガル、スペインを旅し、その後、東のギリシア、トルコを目指すことになるのである。このように、バイロンの旅はヨーロッパの覇権争いの中でも特に、地中海での制海権の支配をめぐるフランスとイギリスの攻防を反映したものであった。

本論は、こうしたバイロンの1809年からの第一回目のグランド・ツアーを歌った『チャイルド・ハロルドの巡礼』(*Childe Harold's Pilgrimage*, 以下『チャイルド・ハロルド』)の第1巻と第2巻や、マルタを歌った詩「さらば、マルタよ」("Farewell to Malta")について、マルタ島を中心として、周辺の国々への旅も視野に入れながら、以下の二点の視点から考察を行うものである。まず、バイロンの旅が、独自の航路を辿りつつも、貴族階級の伝統的なグランド・ツアーと同様に、古代神話や古典文学に象徴される伝統への憧憬に基づくものであったことを考察する。そして最終的に、古典的知識に彩られたバイロンの詩行が、当時のヨーロッパの地政学や海上王国イギリスの姿を現実的に描き出すものでもあったことを論じる。

2. バイロンのグランド・ツアーにおけるマルタ島と古典文学

まず、バイロンの1809年から1811年までの第一回目のグランド・ツアーがどのような旅であったかを、マルタ島での滞在を通して概観する。バイロンは、1809年8月31日にジブラルタルからサルディニア島、シチリア島を経て、マルタ島のヴァレッタに到着する。そこで3週間ほど滞在して9月21日にマルタ島を発ち、ギリシアに向けて旅立つ (*BLJ* 1: 226)。そして、1811年3月にこのグランド・ツアーの帰路において再びマルタ島に立ち寄り、都合二回マルタ島を訪れることになる。

第一回目のグランド・ツアーを歌った『チャイルド・ハロルド』第1巻、第2巻において、マルタ島は第2巻で言及されるが、そこではマルタは「カリプソの島々」("Calypso's isles")として表象される (*CHP* 2.253)。

But not in silence pass Calypso's isles,
The sister tenants of the middle deep;
There for the weary still a haven smiles,
Though the fair goddess long hath ceas'd to weep,
And o'er her cliffs a fruitless watch to keep
For him who dar'd prefer a mortal bride:
Here, too, his boy essay'd the dreadful leap
Stern Mentor urg'd from high to yonder tide;
While thus of both bereft, the nymph-queen doubly sigh'd. (2.253-61)

カリプソへの言及は、ホメロス (Homer) の叙事詩『オデュッセイア』(*Odyssey*) を喚起する。しかし、ここで描写されるカリプソの物語は、フランスのフランソワ・フェネロン (François de Salignac de La Mothe-Fénelon) による『テレマコスの冒険』(*Les Aventures de Télémaque*) に基づくものである。フェ

ネロンの物語では、帰らぬ父オデュッセウス (Odysseus) を探しに息子テレマコス (Telemachus) が旅に出て、息子もまたカリプソの魔力の虜となりそうになった際に、オデュッセウスの友人であり、テレマコスの師でもあったメンター (Mentor) によって、海に突き落とされて難を逃れることになる。バイロンの詩行においても、カリプソが二度ため息をつくのは、イタケ (Ithaca) で貞節を守りながら夫の帰りを待つ妻ペネロペ (Penelope) の許に帰ることにしたオデュッセウスと、その息子テレマコスの二人を失ったことである (田吹 107-08; 阿部 228)。しかし、航海中のハロルドがマルタ島の陸地を見出し、「見よ、陸だ。全て事も無し」 (“lo, land! and all is well.”) と吐露する思いは、トロイア (Troy) 戦争を終えて、故郷への帰路に嵐に襲われた後に、さらなる10年もの間航海することになるオデュッセウスが、陸地を見出した感慨にも通じるものであろう (CHP 2.252)。¹ ギリシア伝説によれば、カリプソの住むオギュギエ (Ogygia) の島は、現在マルタ島の北にあるゴゾ島といわれている (田吹 106; 阿部 227)。『オデュッセイア』では、その島に住むカリプソという女神がオデュッセウスに恋情を抱き、7年間島の洞窟にオデュッセウスを閉じ込め、自分の手元に置いておいた。しかし、イタケの島に残してきた妻ペネロペのもとに帰ることを切望していたオデュッセウスは、ゼウスの計らいでカリプソのもとに遣わされたヘルメスによって、解放されることになる。その際カリプソは、オデュッセウスが故郷に帰るための筏作りを手伝い、斧を渡し、ポプラや樅の木などの巨木が茂る場所を教える。そこで、オデュッセウスは、帆柱や帆桁や舵を作り、カリプソにもらった布で帆を張り、梶子を用いて筏を曳いて故郷の海を目指すのである (ホメロス 139-40)。

こうしたオデュッセウスとカリプソの物語に言及する『チャイルド・ハロルド』において、「地中海に浮かぶ二つの姉妹の島々」 (“The sister tenants of the middle deep”) は、マルタ島とゴゾ島を指しており、「いまだそこでは、疲れた者に安息の港が微笑みかける」 (“There for the weary still a haven smiles”) と歌われる。二つの島が “haven” 「安息の港」と呼ばれる理由は、『オデュッセイア』へのアルージョンとマルタ島の歴史から窺い知ることができる。まず、『オデュッセイア』の旅のモチーフは、強い望郷の思いであり、その思いに駆り立てられて船は進むといえる。しかし、オデュッセウスの旅は、望郷の思いに逆らうかのように、キルケ (Circe) によって一年間彼女の館に留め置かれたり、カリプソによって7年間も島に閉じ込められたりと苦難の旅であった。そうしたオデュッセウスの苦難の中で興味深い点は、キルケが旅に疲れたオデュッセウスを湯船に入れ、オリーブの油を肌に塗ってやり、美しい衣を与え、貯えの食料を惜しみなく使ってご馳走を差し出すことである (ホメロス 263)。また、カリプソは上述したように、オデュッセウスのために筏を作る手はずを整え、贈り物を与え、故国の方角を教える。すなわち、こうした異国の者へのもてなしが『オデュッセイア』の第二のモチーフと考えられる (伊藤 23-24)。古典文学において、異国の者をもてなし、贈り物を与えて送り出すという、旅人へのもてなしの礼節が、異国を巡る旅の背景に存在したといえる。バイロンがイベリア半島での長旅の末に、当時イギリスの統括地であったマルタ島やゴゾ島の陸地を見出し、そこを安息の港と呼ぶことは、古代のホメロス以来の冒険譚の伝統であったともいえる。

実際に、旅の友であったホブハウスの日記には、バイロンらが島を訪れた翌日には、イギリスによる統治下のマルタで高等弁務官であったアレクサンダー・ボール海軍少将 (Rear-Adm. Sir Alexander Ball) の邸宅に招かれたり、奇しくも1804年から1806年にコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge) がマルタ島に滞在した際に住んだ家と同じ家を滞在場所として提供されたりしたことが書かれており、一回目のマルタ島滞在では、もてなしを受け居心地の良い思いをしたようである (Cochran 34-35)。² また、ホブハウスの日記では、バイロンがマルタ島で午前中はアラビア語を学び、午後には海で泳いだり、知人らと夕食を共にしたり、オペラを観劇したりするなど、気ままな滞在生活を送った様が窺え、長旅の末に、マルタ島では休息を見出したといえる (Cochran 35-36)。³

また、マルタ島が安息の港と見なされていたことは、マルタの首都ヴァレッタの歴史からも推測することができる。マルタは1529年からフランス、イングランドなど欧州8カ国からなる聖ヨハネ騎士団、後のマルタ騎士団によって治められ、1565年のオスマン・トルコによる大包围戦 (Great Siege) をしのぎ、1798年にナポレオン率いるフランスの軍隊にその地を明け渡すまで、268年間騎士団の国であった (橋内 194-95)。⁴ 騎士団は慈善事業でその名を知られており、慈善事業は医療活動や貧困対策から、海賊に拉致された奴隷の解放のための交渉などにおよび、騎士団によって設立された医療施設は、第二次世界大戦の間も活動していたといわれる (関根 286)。したがって、マルタ騎士団の慈善活動に象徴される奉仕の精神からも、バイロンが訪れたマルタ島が避難所としての haven と当時から認識されていたと考えられる。バイロン自身も、1809年の母親宛の手紙の中で、マルタ島の人々が「親切にもてなしてくれ、好感が持てる」

(“hospitable & pleasant”) と書き記しており、マルタ島がバイロンの長い旅の中継地点であり、ひとときの休息の地でもあったことが窺える (BLJ 1: 223)。

3. マルタ島に見る古典神話の風景と近代的風景

バイロンは、このようにマルタ島とゴゾ島をホメロスの『オデュッセイア』の舞台となし、カリプソがオデュッセウスを解放した場面を思い浮かべ、「美しい女神が泣くのをやめ、／岩壁の上から、人間の妻をあえて選んだ者を／甲斐無くも見つめ続けるのをやめて欲しい」(“the fair goddess long hath ceas'd to weep, / And o'er her cliffs a fruitless watch to keep / For him who dar'd prefer a mortal bride:”) と歌う (CHP 2.256-58)。そして、そうした神話の時代は終わったが、「これを信じてはならぬ、従順な若者よ、気をつけよ／人間の女王が危険な王座につき、／新たなカリプソに会うかもしれない」(“But trust not this; too easy youth, beware! / A mortal sovereign holds her dangerous throne, / And thou may'st find a new Calypso there.”) と述べた後、「美しいフローレンスよ」(“Sweet Florence!”) と呼びかける (CHP 2.263-66)。フローレンスは、バイロンがマルタ島滞在中に愛したというコンスタンス・スペンサー・スミス夫人 (Mrs. Constance Spencer Smith) に言及するものであり、古代神話のカリプソは、当時の実在の人物であった「新しいカリプソ」へと変容する。バイロンとスペンサー・スミス夫人との恋愛は、未遂には終わるとはいえ、決闘沙汰まで引き起こすほどであったことがホブハウスの日記にも記されているが、2度目の滞在までにはすでにバイロンの熱は冷めていたという顛末を迎える (Cochran 37, 40-43, n. 91; 田吹 109-12)。このように、マルタ島は古代の神話を喚起する海と伝説の国であり、その“haven”へと誘われたバイロンの愛と旅は (CHP 2.255)、オデュッセウスの愛と旅に重ね合わされて歌われることになる。マルタ島への旅がホメロスの旅を通して語られるとき、バイロンのギリシア古典への憧憬が映し出されると同時に、当時のマルタ島の風景も想起されるといえる。

さらに、非常に興味深いことに、古典の神話を通して語られる伝説のマルタ島のイメージと同時に存在するのが、19世紀初期の時代を物語る、マルタ島に入港する帆船のイメージである。オデュッセウスの筏が、帆を張って走ったように、『チャイルド・ハロルド』の旅も、「風や強風、航路の変更、上手回し、／波や風の例の気まぐれ」(“the calm, the gale, the change, the tack, / And each well-known caprice of wave and wind:”) に左右される帆船による旅であり、実際マルタ島までバイロンが乗船した船は帆船であった (CHP 2.246-47)。まず、バイロンの旅では、ジブラルタルからマルタ島に郵便船 (Packet Boat) で到着する。スペインのカディスで、フリゲート艦ハイペリオン (Hyperion) 号の艦隊長であったパーヴァス艦隊長 (Admiral Purvis) と食事を共にし、カディスからジブラルタルまでフリゲート艦に乗船して航行するという便宜を与えられることになるのだが、ジブラルタルからは、マルタへと向かう軍艦は無く、郵便船でマルタ島へと向かうことになる。バイロンは、1809年8月15日の母親に宛てた手紙の中で、そのような事情を記しており、郵便船がスピードも速く、船の設備も良いと記している (BLJ 1: 221)。⁵ こうした帆船でバイロンは船旅をしていたと考えられるが、時代は1807年にアメリカでスコットランド人移民のフルトン (R. Fulton) が、木造の蒸気船をハドソン河で定期就航させる時代であった (北 3)。そして、1840年にはイギリスが、マルタ島を経由し、植民地インドとアレクサンドリア (Alexandria) 間を結ぶ蒸気郵便船による航路を獲得することになる (北 6)。すなわち、「波や風の気まぐれ」による帆船の旅は (CHP 2.247)、やがて蒸気船による安定した旅の風景へと変化しつつあった時代でもあった。バイロンが乗船した郵便船はまだ帆船であったと考えられ、海の旅がオデュッセウスの神話を共有できた最後の時代であったともいえるのである。したがって、バイロンの詩が歌う古典神話の島への旅は、すでに近代的な船の旅へと変化しつつあり、カリプソの住んだ島は、「新たなカリプソ」の住む近代的な風景を呈しつつあったといえる。

さらに郵便船そのものが、当時のイギリスの政治的思惑を浮き彫りにする。当時イギリスが経済体制を整えるべく、海運省を通じて、18世紀より植民地各地を連結する郵便船航路の建設を図りつつあったことを考慮に入れば、マルタ島へと向かう郵便船はイギリスによる植民地支配の一手段であったと考えられる (北 4)。バイロンが「私の郵便局」として形容したマルタ島は、実は植民地の安定的支配を図るためにイギリス政府が開発した航行ルートの中継地点であったと考えられる。したがって、マルタ島は、古代神話の島であった一方、当時、郵便船が運ぶ最新の情報が行き交う通信や諜報活動の要の地となっていた可能性が考えられ、バイロンの詩行に見るマルタ島には、古代と近代の風景が二重写しとなって浮かび上がるといえる。⁶

4. 『チャイルド・ハロルド』 第1巻, 第2巻における過去と現在

このように、バイロンの旅は、ヨーロッパの歴史と当時の現実的風景という二重の詩的ヴィジョンを喚起する。『チャイルド・ハロルド』 第1巻と第2巻におけるマルタ以外の描写においても、ヨーロッパの文学的伝統に連なる土地に対するバイロンの憧憬の思いは、同時に、凋落したその地の現実的状況への嘆きと重なる。例えば、第1巻において、スペインの地はバイロンによって「麗しいスペインよ、名だたるロマンスの土地よ」(“Oh, lovely Spain! renown'd, romantic land!”)と賛美される(CHP 1.387)。そして、ロマンスの地であるスペインは、「目覚めよ、スペインの息子たちよ、目覚めよ、進め、／見よ、おまえたちの古代の女神、騎士道が叫んでいる」(“Awake, ye sons of Spain! awakel advance! / Lo! Chivalry, your ancient goddess, cries,”)と鼓舞され、ロマンスと騎士道に象徴される中世の文化に彩られたスペインの再興が希求される(CHP 1.405-06)。しかし、かつて騎士道の女神が手にしていた「血に飢えた槍」(“her thirsty lance”)は、「灼熱の砲火による煙」(“the smoke of blazing bolts”)と「大砲の咆哮」(“engine's roar”)とに取って代わることになる(CHP 1.407, 409, 410)。すなわち、中世の時代からタラベラの戦い(Battle of Talavera)が起こった当時の状況へと舞台が移るといふ、過去と現在とを行き来する描写がなされ、スペインのかつての栄光と現在の悲劇が映し出される。

特に、第1巻の422行目において、タラベラの戦いに言及した「血塗られた戦闘」(“Red Battle”)は、山の頂に立つ「巨人」(“the Giant”)に喩えられ、「赤く血に染まった髪は陽光に黒ずみ／熱い手には死の砲弾が光り、／その目はねめつけるすべてのものを焦がす」(“His blood-red tresses deep'ning in the sun, / With death-shot glowing in his fiery hands, / And eye that scorcheth all it glares upon;”)と擬人化される(CHP 1.424-26)。血塗れの姿をした「巨人」は、かつて騎士道の女神の武器であった「槍」とは全く異なる、当時の最新兵器であったであろう「砲弾」を手にしており、ナポレオンのフランスと、イギリスとスペインの連合軍との戦いの凄まじさが歴史の移ろいの中で描かれる。そして、巨人は「決して自由ではなかった者が自由のために戦い／王なき民が力なき国家のために闘う」(“They fight for freedom who were never free, / A Kingless people for a nerveless state;”)という、スペインの脆弱な政府と主君のいない国民の前に立ちはだかる、武力と戦争の無惨さを喚起することになる(CHP 1.883-84)。

このように、栄光に彩られたヨーロッパの過去の風景と現実の無惨な風景という二重の視点を、同世代のキーツやワーズワス(William Wordsworth)の詩作と比較してみれば、そうした二重の視点はバイロン独自の視点として浮かび上がってくる。例えば、バイロンの物語詩とキーツの叙事詩を比較するために、バイロンとキーツがともに、“nerveless”という語を使用しながら歴史の流れを描写した箇所注目してみる。バイロンは『チャイルド・ハロルド』において、スペインの国王フェルナンド7世が君主として王位につくが、ナポレオンのフランスによって王位を篡奪されたことに言及しながら、スペインを「王なき民」の国と形容し、そうした国のあり方を「力なき国家」(“a nerveless state”)として歌う。興味深いことに、この“nerveless”という形容詞をキーツも叙事詩「ハイペリオン」(*Hyperion*)の中で使用し、凋落するスペインと同様、没落する神々としてのタイタン族の姿を形容する。「ハイペリオン」は、タイタン族の没落によって、新たなオリンポスの神々が台頭するという神々の交代劇を描いており、地底に墮ちたタイタン族の長であるサターン(Saturn)は、“nerveless, listless, dead, / Unscseptred;”(「無気力に、ぐったりとして、死んだように、／王笏も持たず」)の状態が登場することによって、タイタン族のその後の没落の命運を象徴する(*Hyperion* 1.18-19)。かつては栄光の国であったスペインが「力の無い国」に墮し、その後フランスやイギリスというヨーロッパの列強によって支配されていく歴史は、かつては神々の長であったタイタン族が、王の笏を手放し、「力の無い」手をさらしながら、若く力強いオリンポスの神々に取って代わられる神話と通底する。しかし、キーツは、この交代劇を、古い文明が新しい力を持った者たちによって乗り越えられていくという、歴史の必定として捉える。さらにキーツは、賢者オシアノスを登場させ、「我々の背後に新しく完璧な者がやってくる／我々から生まれたが、美においてより勝る力を持ち、／我々を凌いでいくことは必定である／我々が栄光においてあの先代の闇を超えるように」(“So on our heels a fresh perfection treads, / A power more strong in beauty, born of us / And fated to excel us, as we pass / In glory that old Darkness:”) (2.212-15)と語らせ、交代劇を歴史的哲理として解釈するのである。政治的権力闘争においてではなく、世界を支配するための哲理において、美学的革新性において勝る若き世代が旧き世代から勝ち取る勝利に、キーツの自由主義的思想を読み取ることができるともいえる。しかし、特筆すべきことは、バイロンの『チャイルド・ハロルド』においては、“a nerveless state”と描写されるスペインが、歴史の必

定として無力に没落するままにまかせておくとするのではなく、自由のために再起すべきであると鼓舞されることである。その詩的思索には、かつて栄華を極めた伝統文化の栄光は死に絶えることはなく、他国の政治的支配という足枷から解放されるべきであるとするバイロンの歴史的視座が存在しており、バイロンの政治的正義に基づく義憤や自由主義的思想を見出すことができる。しかし、一方で、そこには貴族階級の文化的政治的支配の残照を背に旅をするバイロンの保守主義的な伝統への思いも相半ばする状況を読み取ることもできるといえる。下層中流階級に属したキーツの詩作と比較すれば、キーツの自由主義的思想の発露は、過去の伝統からの超克と新興階級による革新の思想にあるといえ、バイロンの自由主義的思想との乖離を見出し得る。しかし、重要なことは、バイロンの詩作の淵源には、貴族階級の自負のみならず、スペインについて、書物のみから得た知識だけでなく、その現実の様を自分自身の目で目撃した詩人だけが語り得るヴィジョンをもとに詩として歌うという現実感が存在することである。

『チャイルド・ハロルド』の第1巻と第2巻の旅を特徴づけているのは、この現実的で直截なヴィジョンである。確かに、バイロンは、スペインの現実の様を見つめ、凋落するその姿を嘆き、それをそのまま歌にするだけでなく、内省にふけることもある。しかし、興味深い点は、そうした内省の結果得られる詩的ヴィジョンは、ワーズワス的な内省によって得られる詩的ヴィジョンのあり方とも相違を示すことである。例えば、第2巻において、帆船から見る風景に、幸せだった少年時代に思いを馳せつつ、魂は「いつしか過去の一年一年を辿る」(“And flies unconscious o'er each backward year.”) (CHP 2.211)。そしてハロルドは、「岩に座り、川や丘に思いを馳せる」(“To sit on rocks, to muse o'er flood and fell,”) という、まさに内省に沈む場面が描かれる (CHP 2.217)。

To slowly trace the forest's shady scene,
Where things that own not man's dominion dwell,
And mortal foot hath ne'er, or rarely been;
To climb the trackless mountain all unseen,
With the wild flock that never needs a fold;
Alone o'er steeps and foaming falls to lean; (CHP 2.218-23)

そして、このように自然について内省することを、「これは孤独ではなく、自然の魅力と語り合い／その宝物が繰り広げられるのを眺めることなのである」(“This is not solitude; 'tis but to hold / Converse with Nature's charms, and view her stores unroll'd.”) と説き、自然と語らうという、一見、ワーズワス的な自然との合一が提示されるかのようである (CHP 2.224-25)。しかし、特筆すべきは、次からの詩行において、栄華を極めた日々に寄ってきては媚びへつらう者が数多くいても、死んだ後には寄りつく人もいない者の境遇こそ、真の孤独であることをバイロンが述べることである。すなわち、内省から得られる詩的ヴィジョンは、自然の中での超越的、普遍的な審美体験と結びつくのではなく、現世での人生の哀感へと通じるのである。実際、内省の後に続く詩行には、上述したマルタ島のコンスタンス・スペンサー・スミス夫人が登場し、男女の恋愛における手練手管が歌われ、現実感に満ちた感覚が詩を推し進めることになる。ワーズワスの詩作であれば、自然やその中に暮らす人々の光景を目にし、バイロンと同様、そこに疎外感や喪失感を感じつつも、内省による時間の経過を経て、読者に自然や人間性の普遍性という詩的「真実」が提示されるといえる。一方バイロンの詩作には、古代から現代という歴史的に長い年月を俯瞰する視点はあるが、そこには、現実を直截に認識することによって、人生の哲理と悲哀を導き出す刹那的なヴィジョンが存在する。したがって、バイロンの詩が、現実世界の多様な出来事の中に見る人生の機微を描く時、画一的なといえる普遍性を目指したワーズワスの詩作とはその方向性において相違をみせるのである。興味深いことに、バイロン自身も『ドン・ジュアン』(Don Juan)の「献辞」において、ワーズワスら湖畔詩人らの視点の「狭隘さ」(“narrowness”)を揶揄し(Thompson 237)、「そんな考えには狭隘さがつきまとう、／君たちが湖を大洋に変えることを切に願うような狭隘さが」(“There is a narrowness in such a notion / Which makes me wish you'd change your lakes for ocean”)と歌っている(‘Dedication,’ 39-40)。すなわち、『チャイルド・ハロルド』のヨーロッパと東洋を跨ぐ異国の海の旅は、1810年に出版されたワーズワスの『湖水地方案内』(Guide to the Lakes)にみる地方主義的な自然の捉え方を凌駕する視野の広さを持ち合わせているといえる。そして、こうしたいわば、コスモポリタンの視野は、バイロンの詩作が単に伝統に埋没する保守主義

に拘泥するものではなく、現実認識に根差した自由主義思想へと向かうことによって得られたものであるといえるのである。

5. 『チャイルド・ハロルド』が描き出す19世紀初頭のヨーロッパの覇権争い

『チャイルド・ハロルド』の第1巻と第2巻を、このような直截的な現実感に着目しながら読み解けば、物語詩は、地中海の制海権をめぐるヨーロッパの攻防を描いた海洋紀行ともなり得る。当時の地中海においては特に、イギリスとフランスの覇権争いが激しさを増しており、その両国の戦いを『チャイルド・ハロルド』の中に読み解くことができる。まず、ナポレオン戦争は、フランスがイギリスに宣戦布告した1803年5月18日を持って始まり、その後1815年11月の第二次パリ条約の締結をもって終わる(小林 431-66)。したがって、1809年にイギリスを発ったバイロンのグランド・ツアーには絶えずフランスとイギリスとの戦争が背景として控えていた。例えば、1808年8月にアーサー・ウェズリー (Arthur Wellesley, 後に Duke of Wellington を授けられる) 率いるイギリス軍が、ジュノー将軍 (Jean-Andoche Junot) が指揮するフランス軍を破り、リスボン郊外のケルス宮殿 (Palace of Queluz) にてシントラ協定 (Convention of Cintra) が結ばれることになる。しかし、ジュノーのフランス軍が降伏したにもかかわらず、2万の軍隊の装備とポルトガルでの略奪物を持ったままフランスに帰国するという結果に終わったシントラ協定を、イギリスでは不公平条約とみなす(堀江 13)。したがって、『チャイルド・ハロルド』の第1巻で、この協定が結ばれた後にリスボンを訪れたバイロンが、実際にリスボンの地を「ここで」と指し示しながら (CHP 1.313), 「あの軍事会議が行われて以来、／シントラよ！ブリタニアはおまえの名に吐き気を催し、／役人たちはおまえの名に苛立ち、／羞恥心があれば、恥ずかしさに顔を赤らめたいことだろう」 (“And ever since that martial synod met, / Britannia sickens, Cintra! at thy name; / And folks in office at the mention fret, / And fain would blush, if blush they could, for shame.”) と歌っている (CHP 1.306-10)。貴族院の議員として当時の政治に当然敏感であったはずのバイロンも、当時のシントラ協定に対して大なる怒りを示すことになる。⁷そして結局、1807年から始まったナポレオン軍のポルトガル侵攻は、ウェズリーの活躍によって阻止されることになったことを、『チャイルド・ハロルド』では、神の「怒りの火の矢は三倍の復讐となって、ゴールの蝗の群れを急ぎ立て／この大地から残虐な敵を追い払い、浄めるのだ」 (“With treble vengeance will his hot shafts urge / Gaul's locust host, and earth from fellest foemen purge.”) とし、フランスへの怒りを顕わにする (CHP 1.214-15)。ここでは、フランス人を、古代ローマ人によるフランス人の呼称であったガリア人と称し、ポルトガルの地を荒らしたフランス軍を、「蝗」のように害悪をもたらす者として喩え、彼らがイギリス軍によって駆逐されたことを神によって罰せられたとして描写している。

さらに、1809年7月末に始まったスペインのタラベラの戦いでは、イギリス軍とスペイン軍がフランス軍の攻撃にさらされるが、最終的に戦いはフランス軍の撤退と、イギリス軍のポルトガルへの帰還をもって終了する(堀江 15)。バイロンは、スペインの旅の途中でこのタラベラの戦いに遭遇することはなかったが、バイロンが1809年の7月27日にタラベラの原野を訪れたわずか10日後にスペイン軍とイギリス軍とが、フランス軍と二日間にわたり激戦を交わすことになるのであり、バイロンの旅が、いかに実際の半島戦争 (Peninsular War) の激戦の中を進んだ旅であったかを捉えることができる(阿部 195-96)。したがって、こうした現実感、「この朝、三つの強国が会し、／「破壊」の社の前で好物の血を流す」 (“For on this morn three potent nations meet, / To shed before his shrine the blood he deems most sweet.”) といった、鮮烈なイメージで描写されている (CHP 1.430-31)。このように、イギリスにとって、イベリア半島は対ナポレオン戦争の主戦場であったために、『チャイルド・ハロルド』の第1巻と第2巻は、海上大国としての勢力圏を拡大していくために長年多くの戦いを行ってきたイギリスの歴史を映し出すといえるのである。

さらに、海上大国としてのイギリスが地中海の制海権を掴むのは、マルタの支配をめぐる攻防から始まる。1798年6月9日、ナポレオン率いる艦隊がマルタを襲う。当時ナポレオンは、旧来の喜望峰経由ではなく、紅海を経由したインド航路を支配することを画策し、エジプト遠征の作戦にとりかかっていた(小林 416)。そのエジプト遠征の途上にあつて、マルタ島に停泊し、食料や飲用水の補給等をマルタ騎士団に求める。しかし、それを拒否されると、ナポレオンは艦隊から威嚇砲撃を開始するが、かつてヨーロッパ最強の要塞をもち、オスマン・トルコの大包囲戦を撃破したマルタは、すでに弱体化しており、6月12日には全島を占領されることになる(関根 287)。マルタの陥落を6月20日にはイギリスのネルソン提督 (Horatio Nelson) が知るところとなるが、その二日後には、ナポレオンはマルタを離れており、その後8月1日にア

ブキール湾 (Aboukir Bay) において、ネルソン戦隊とナポレオンのフランス軍がアブキールの戦い (Battle of Aboukir, ナイルの海戦, Battle of the Nile と呼ばれる) を開始する (小林 401)。このアブキールでの勝利によって、イギリスは地中海を奪回したことになるが、ネルソン提督はマルタをフランスから奪還することがナポレオン戦争での最終勝利を収める近道だと考え、10月4日には、盟友アレクサンダー・ボール艦隊長の率いるフリゲート艦をマルタに向けて出航させる (関根 289)。⁸最終的にイギリス軍がマルタを制圧し、1800年9月にフランス軍はヴァレッタの砦を引き渡し、イギリスの支配が始まることになる (関根 289)。このように、バイロンの地中海を巡る旅は、イギリスが地中海の制海権を得るために戦ったフランスとの攻防が映し出される旅でもあった。

6. マルタの隔離政策

1811年4月30日にバイロンは、ギリシアからの帰路にマルタ島に再び寄港する。当時、ヴァレッタの港の真ん中にあるマヌエル島にラザレット (Lazaretto) と呼ばれる検疫所があり、コレラやペストの流行時に、マルタ島に到着した旅行者、とくに東方からの旅行者を隔離 (quarantine) し、一定期間収容する施設となっていた (Vassallo 65)。バイロンも東方のギリシアからの寄港であったこともあり、この施設で18日間の隔離を経験する。このラザレットは、数階建ての建物で、ポルチコ (柱廊式の玄関) が海に面し、収容される部屋は大きな中庭に面していた。部屋には椅子が2脚とテーブルと寝台があるだけの空間で、さらにお金を支払えば、マットレスや枕などが追加されるという仕組みになっていた。ここでは、隔離された者は面会者がいれば、衝立を通して会話ができただけで、接触は禁じられるといったように、完全な監視下に置かれたようである (Vassallo 66)。したがって、この隔離は、バイロンに精神的な苦痛と憂鬱をもたらしたようで、1811年5月26日に書かれた「さらば、マルタよ」の詩の中で、「さらば、忌々しい隔離よ／わたしに熱と憂鬱をもたらした」 ("Adieu, thou damned'st quarantine, / That gave me fever, and the spleen!") と歌われている (11-12)。さらに、マルタの街中の階段、商人、大衆、女性たち、イギリス軍兵士など、マルタについてバイロンが不愉快に思った数々の点があげつらわれ、詩行は滑稽な風刺となっている。そして最終的にマルタ島をバイロンが「軍の兵士たちの小さな温室よ」 ("Thou little military hot-house!") と呼ぶ時 (46)、マルタ島が軍事的力を涵養する理想の場所であったというバイロンの認識に辿り着く。すなわち、マルタ島が伝説の安息の港であるのみならず、軍事的要衝であったということは、『チャイルド・ハロルド』の第1巻と第2巻の旅が、当時のヨーロッパの過去と現在を映し出す旅であったことを示しているといえるのである。

* 本稿はマルタ島について焦点をあてた内容であるが、この原稿は、2011年、2014年にマルタ島のヴァレッタにて開催された Encountering Malta: British Writers and the Mediterranean 1760-1840, Encountering Malta II: Literature, Landscapes, Politics の両国際学会に参加した経験に基づき、マルタ島とバイロンをめぐる内容について発表する機会を日本バイロン協会より与えていただいたのを機にまとめたものである。また、本稿は2022年7月23日に開催された2022年度日本バイロン協会談話会 (於 名古屋国際センター) にて口頭発表した内容に加筆・修正したものである。

なお、本稿は、JSPS 科研費 JP21K00344 の助成を受けたものの一部である。

注

¹ 『チャイルド・ハロルドの巡礼』の訳については、東中訳を参考にした。

² ボール海軍少将は、コールリッジが1804年から1805年にかけて、マルタ滞在時に秘書をしていた人物である。

³ ジブラルタルからマルタ島まで郵便船タウンゼンド (Townshend) 号に、バイロンらとともに乗船していたジョン・ゴルト (John Galt) が後に記した『バイロン卿の生涯』 (*The Life of Lord Byron*) (1830) の中では、バイロンらがマルタ島に到着すると、砲台からの歓待の礼砲を期待し、ボール海軍少将に上陸の知らせをしたが、礼砲の音も虚しく、期待外れであったために、他の乗客は船長とすぐに上陸したにもかかわらず、バイロンらは船にしばらく留まったことが記されている。安息の港であるマルタ島で、特に歓待されるべき人物であると自らを見なしていたと考えられるバイロンの自負を窺い知ることができる (Galt 71-72)。

⁴ 首都ヴァレットタは、大包围戦で陣頭指揮を執った聖ヨハネ騎士団の団長ラ・ヴァレットタ (La Valletta) の名前に由来する。ヴァレットタの街は、イスラム勢力からヨーロッパを守るために、半島そのものを城壁で囲み、海上からの攻撃に対する城砦となし、さらに陸上からの侵入に対しては、濠を半島内部に作ることで防衛という要塞都市を作り上げた。したがって、バイロンらが海上から目にしたマルタ島の港は、詩行で歌われるいわゆる陸地というよりも、石造りの要塞の様を見せていたと思われる。

⁵ こうした旅の状況にも見られるように、おそらくバイロンが、貴族階級に属し、高い階級の知己も得て、さらに、1809年3月に貴族院での議席を得ていたこともあり、旅の様々な場面で便宜を得ていた可能性が考えられる。1818年に足に水膨れを作って国内を旅した、同じ世代のロマン派詩人のキーツ (John Keats) の徒歩旅行との差違を感じざるを得ない。

⁶ 『フィンデンの挿絵画によるバイロン卿の生涯と作品』 (*Finden's Illustrations of the Life and Works of Lord Byron*) に所収のターナー (J. M. W. Turner) の『マルタ』と題された絵画の後景には、帆船が描かれており、バイロンが乗船したと考えられる帆船のイメージを伝えている (Brockedon)。

⁷ ワーズワスも自身の「シントラ協定論」 (*Concerning the Relations of Great Britain, Spain and Portugal, to Each Other, and to the Common Enemy, at This Crisis; and Specifically as Affected by the Convention of Cintra*) (1809) において、シントラ協定に対する批判を展開している。

⁸ このポール艦隊長こそが、上述したように、バイロンがマルタ島を訪れた時には、高等弁務官としてマルタにおり、バイロンが邸宅を訪れるなどして親交をもった人物である。したがって、バイロンは、地中海でのさまざまな戦いについての話を直接ポールから耳にしていたかもしれないと推測すれば、マルタ島での交友が『チャイルド・ハロルド』に見出される詩の現実感をより強める結果をもたらした可能性がある。

Works Cited

- Brockedon, W. *Finden's Illustrations of the Life and Works of Lord Byron*. Vol. 1, London, 1833.
- Byron, George, Gordon. *The Complete Poetical Works*. Edited by Jerome J. McGann, vol. 1, 2, 5, Oxford UP, 1980.
- . *Byron's Letters and Journals*. Edited by Leslie A. Marchand, vol. 1, Harvard UP, 1973.
- Cochran, Peter, editor. *The Diary of John Cam Hobhouse*.
<https://petercochran.files.wordpress.com/2009/12/03-malta.pdf>.
- Coole, Julia. "Who shall now lead? The Politics of Paratexts in *Childe Harold's Pilgrimage*, Canto I-II." *Romanticism*, vol. 24, no. 2, 2018, pp. 148-57.
- Galt, John. *The Life of Lord Byron*. Cassell, 1911.
- Hill, David. "Byron's Europe: Plate 12, Valletta Harbour, Malta." *Sublime Sites*, 28 Dec. 2020,
<https://sublimesites.co/?s=Malta>.
- Keats, John. *The Poems of John Keats*. Edited by Jack Stillinger, Harvard UP, 1978.
- Martin, Philip W. "Heroism and History: *Childe Harold* I and II and the Tales." *The Cambridge Companion to Byron*, edited by Drummond Bone, Cambridge UP, 2004, pp. 77-98.
- Thompson, Carl. *The Suffering Traveller and the Romantic Imagination*. Clarendon, 2007.
- Vassallo, Peter. "Byron, Newman, Scott, and Thackeray: Writers in the Lazaretto." *The Wordsworth Circle*, vol. 43, no. 2, pp. 65-70.
- 阿部 知二『バイロン』(研究社英米文学評傳叢書) 研究社, 1937.
- 伊藤 照夫「『オデュッセイア』における風景: 『見る』と『語る』」『西洋古典論集』第7巻, 1990, pp. 23-40.
- 北 政巳「イギリス海運企業史—P&O社の19世紀アジア航路事業展開—」『創価経済論集』第27巻, 1998, pp. 1-16.
- 小林 幸雄『図説 イングランド海軍の歴史』原書房, 2007.
- 小宮 正弘「フランス近代植民地貿易にみる英仏抗争の構図」『静岡産業大学国際情報学部研究紀要』第6巻, 2004, pp. 181-93.
- 関根 謙司「マルタ史試論—2 (1676年から現代まで)」『文京学院大学人間学部研究紀要』第15巻, 2014, pp. 285-305.

- 田吹 長彦『チャイルド・ハロルドの巡礼 第二編 注解』九州大学出版会, 1998.
- 橋内 武「地中海小国マルタの言語と言語教育」『国際文化論集』第37巻, 2007, pp. 193-215.
- 東中 稜代『チャイルド・ハロルドの巡礼—物語詩』修学社, 1994.
- ホメロス『オデュッセイア (上)』松平 千秋訳, 岩波書店, 1994.
- 堀江 洋文「半島戦争とカデイス憲法」『専修大学人文科学研究所月報』第251巻, 2011, pp. 1-43.